

綺麗な花には毒がある

羽沢ちゆぐみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の男子高校生は入学初日

幼いころに仲の良かった美竹蘭と再会を果たす

しかし蘭はもう1人の仲の良い女子、弓月明日香とは仲が悪く喧嘩に

そんな中、入学式の日には蘭に告白をされて…

目次

再会	1
妖艶なる毒牙	10
小さき花	20
緩い花にもご用心	29
愛おし毒花	35
死毒に支配されしアングレカム	42
白毒牙編	
再開	53
黒く毒される墮天使	61
滲み出す毒素	66

再会

「おおきくなつたらね！けつこんしょー！」

幼いころの、小さな夢

「わたし、しゅーくんのことだーいすきー！」

それは小さな子どもが交わすありきたりな約束

しかしそれは歳を重ねるごとに忘れていつてしまうもの

不思議と約束をしたことは覚えている けれど、その子は誰だったのか、もう覚えていない

—————

4月

「おはようございまーす！」

「ご入学おめでとうございませす！」

春、今日から高校生だ まだ休み気分の抜けない頭を無理やり起こしまだ着慣れない学校の制服を来て校門をくぐる

俺、三ノ輪修はどこにでもいる普通の男だ。頭はそこまで良いわけでもなく少しス

ポーツは得意、だけど習い事や中学の時は部活なんて事はした事ない 恋愛？彼女いない歴〃年齢ですが？

まあそんなことはどうでもいい 彼女なんてこれから作って花の高校生活を送ればいいんだから 俺はそんな期待を胸に教室の扉を開けた

「はあ：： わかつちやいたけどよお」

彼女ができるどころか他の奴に声なんてかけられるわけがない

当たり前だ、俺は生まれつきのコミュ障なんだから 中学の時も女子と話したことなんて係の仕事の時とかだけだ 話しかけようとしても「目付きが怖い」とか「そもそもあんな人いたっけ？」とかヒソヒソと言われてる気がして俺みたいなオタク系男子が話しかけられるわけがない いや：： 一人だけ居た、女だとはとても思えないけど一人だけいつも話をしている奴がいる

「よお修、高校でも同じクラスかー」

「またお前と一緒になんて俺の高校生活もお先真つ暗か：：」

俺に話しかけてきた髪の毛の短い女子生徒 中学3年間同じクラスだった弓月明日香、見た目通りどこからどう見ても男にしか見えないスポーツ女子だ

「だーれがお先真つ暗だつてえ？顔だけ無駄に良いクソ陰キャ野郎が」

「お褒めに預かり光栄ですねー男勝りのやさぐれビッチさん、はやく席に着いたらどう

でしようか」

「言つたな？今ビツチつて言つたな？」

「いいから早く行けよ」

「だつて私あんたの隣だし」

「そう言い明日香は隣に座つた　なんてこつた、せめて清楚で可愛げのある女の子がよかつた

「はあ……憂鬱だ」

「そんな嬉しいがるなー、3年間よろしくなっ！」

「へーへー、よろしくー」

俺は大きなため息をついて携帯をいじる、そういえばまだ前の席の人が座つてないな　誰が来るんだろうか：：　せめて横のうるさいゴリラ女なんかよりもっと可愛い女の子がいいなあ　まあ男かもしれないけど

流石に高望みし過ぎか、そんなことを思っていた時期も俺にはあつた

「ひまり席どこ？」

「私はあそこー！巴隣だねー！」

「おう、蘭は？」

「私はあつちだね、モカは1番前でしょ？」

「そうだよ、つぐも同じクラスだったら良かったのにね」

なんか騒がしい4人組が入ってきた どうやらお互い知り合い同士みたいだな、いいよなあクラスに知ってる奴いるとか 俺もだけど ん？なんか1人俺の前の席に座ったぞ？ 黒髪か、いいねえ清楚っぽい

(声掛けてみるか？ いやけど相手は女子だし初対面だし変な印象与えて嫌われるのも嫌だし…) いやいや何迷ってんだよ俺！ 彼女作るんだろ！ しっかりしろ！ いやけどこえーよ！)

ぶつぶつと葛藤する俺、横からじとーつとした変な視線を感じるが気の所為だろう

ただその時、その女の子が何を思ったのか 不意に振り向いた

実際はキョロキョロと教室を物珍しく眺めていただけなのだが、その時の俺にはその女子が俺の方を振り向いたようにしか見えなかった

俺も顔をたまたま上げた時にその女の子が振り向いたから、目が合った 文字通り目と目が合って、静寂が流れたような気がする

「あ…え…え…え」と

俺は何か言おうと頭をフル回転させるが上手く言葉が出てこない

その女子は俺の顔をまじまじと見ている なんだ？ 何か俺の顔にでもなにか付いてるのだろうか？ というかなんでこいつは髪に赤いラインが入ってたんだ

「もしかして……しゅーくん……？」

ん？今しゅーくんって言ったか？誰だっけ？なんかそんな呼び方をするやつを知っている気がする

「え……えつと……ごめん、誰？」

「あ……う……ごめんなさい、人違い」

「い、いや……！そうじゃ……なくて……」

なんか凄い気まづいんだけど？え、何？この子もコミュ障なの？同類なの？めっちゃ話しづらい

「名前、教えて」

「は、はい？」

「名前！私、美竹蘭」

蘭？なんか聞いたことある気がする　どこか懐かしさを覚える名前だな

「俺は三ノ輪修、よろしくな」

「やつぱり……しゅーくんじゃん」

うーん？やつぱり？わからんけどどうやらこいつは俺の事を知っているらしい　なんかムスツとしてるけど割と可愛いから全然怖くないぞ

もう少し聞いてみるか

「えっと、そのしゅーくんって……やっぱ俺の事だよな？」

「当たり前じゃん……私の事覚えてないの？小さい頃遊んだのに」

「小さい頃？うーん……すまん、その呼ばれ方には覚えがあるけど美竹さんの事は覚えてない……」

うっわあ……ますますむくれてやがる いやそもそも小さい頃ってどのくらい小さい時だよ、10年以上前だといくら記憶力だけは良い俺でも覚えてねえぞ

「何？修の知り合い？」

「まあそんなとこだ」

横から入ってくるんじゃねーよ……！知り合いつつつてもこっちは覚えてねーつての

「誰？」

「うちは弓月明日香、修とは中学三年間同じクラスでよくつるんだよ」

「勝手に引っ付いてきてんのは明日香の方だろうが」

「いつもボツチだから私が声掛けてやってんだろうがクソ陰キャ！」

「だーれも頼んでねーつての糞ビッチ！」

こうなるからできれば話しかけてこないでほしいものだ 周りの視線がなんか凄く痛い気がする 入学早々変な奴だと思われてんだらうなあく……

「弓月さんはちよつと黙ってて：。しゅーくと話してるのは私なんだけど」
「あん？ちよつと、そんな言い方は無いんじゃない？」

え？なんか2人とも睨み合ってるんだけど？なんでそんな喧嘩腰なの？目の前で喧嘩なんかしてくれるなよな 絶対俺の方に来るやつだろ？アニメでよくあるぞそういうの

「別に私はまだ話が終わってないから黙ってて言ってるだけなんだけど」

「だからさあ、そういう言い方しなくていいじゃん、何？喧嘩売ってるの？」

「おい蘭、やめろ！入学早々何やってんだ！」

さっきの4人組のうちの1人がこつちに気づいてめっちゃ焦ってる 流石に俺も止めた方がいいか

「明日香お前もそのくらいにしとけ、美竹さんも別に悪気があったわけじゃ無いだろうし」

「うっさい！私が間違ってるっていうの？」

「そうじゃねーよ、確かに言い方は悪かったかもしれないけどそんな喧嘩腰になる事でも無いだろ」

明日香は分かっていたよとだけ不満そうに言った まあこいつも馬鹿じゃないから問題を起こすようなことは無い 美竹さんは明日香の方をずっと睨んでる

「えつとー：。すまないな、蘭は口下手でよく言い方が悪くなるとこあるんだ。悪気はないと思うから許してやってくれないか？」

明日香と同じような感じのする女子だな 可愛いって言うよりかっこいいの部類に入る

「こ、こつちもすまん：。明日香は喧嘩つばやいから」

「おーし、私が来たぞー席に着けー！」

「おつと、わりい！この話は後でな！」

なんだか気さくな女の先生が教室に入ってきて女子生徒は自分の席へと戻って行った なんだ？この女子はみんな男っぽいのか？

横と前の2人はめつちや不機嫌そうな顔でお互いそっぽを向いてる まったく、あんまり困らせないでほしいものだ

—————

入学式で校長の長つたらしくてありがたーいお話を聞き流し、午前中で学校は終わった

依然として2人の仲は険悪で話すどころか近づこうともしない 放課後、部活も無し真つ直ぐ帰るかーと思っていたところに前の席からお声がかかる

「ねえ、この後何か予定あるの？」

「いや、別に無いけど?」

「なら私と一緒に帰ろうよ、その…朝の話の続きもしたいし」

ん?これはもしや何かフラグの起こるイベントだったりするのか?

いやしかしだな、別にデートのお誘いという訳でもないしましてや話の続きとも言っている。ここは紳士に対応するのがいいかな

「いいけど、友達はいいの?」

「うん、言つてあるしみんなバイトあるから」

なんだ、もうバイト始めてるのか 偉いな

「じゃあ行くかうか」

「うん」

なんか凄い緊張する だって女の子と2人で帰るなんて初めてのことだぜ?明日香とは帰る方向が違うから一緒に帰るなんてこと無かったから本当にはじめてのことだやばいめつちやドキドキする

ただ俺は知らなかった この子との出会い… もとい再会がこの高校生活を大きく狂わせることになるとは

妖艶なる毒牙

「ねえ！ちゃんと答えて！あの明日香って人は何なの？」

困ったことになった…… 前回の続き、つまりは放課後に同じクラスになった美竹蘭と一緒に帰ることになったんだが、いきなり明日香とはどういう関係なのかとかいう類のことを聞かれる。

「だから、本当に中学三年間同じクラスだったってただだって。あいつとはそれ以上のことはねーよ」

「でもしゅーくん、あんなに仲良さそうに話してたじゃん！それに私の事忘れてたし…… あんなことまでさせといて……」

あんな事ってなんだよ気になるじゃねーか!? え？俺はこの美竹蘭に何かしたってのか？

「あれ？蘭ちゃん？」

前から可愛らしい女の子が歩いてきた。蘭の知り合いのようだ、どこかの店の制服を着ているし買い出しだろうか

「つぐみ？どうしたの？まだ店の時間のはずだよね」

「うん！ちよつとお母さんに頼まれてお使いにね。それより、そっちの人は？」

くりつとした目をこちらに向ける。なんか女の子って感じがする雰囲気だ、こういう子が彼女だったらなあ…

「こ、こんには、美竹さんと同じクラスの三ノ輪修です…」

「こんには！蘭ちゃんと同じクラスって事はひまりちゃん達とも同じクラスかー。私は羽沢つぐみ、A組だから学校でも会えるかもね！」

純粹な笑顔に心を撃ち抜かれる、ああ…可愛い。明日香や美竹さんも見習ってほしいものだ。

「あ、蘭ちゃん、お母さんから今度の土曜日のシフトなんだけど…」

「ん？何？」

「その… ホールと厨房変わってもいいかって」

「うん、別にいいけど」

「ありがとう！伝えとくね」

なんかシフトとか聞こえたけど美竹さんもバイトしてるみたいだな。んー、俺もはじめてみような… 特にすることも無いし、金も稼ぎたいし。そういやうちの学校ってバイトして良かったっけ？

「じゃあ、そろそろ私戻るね！蘭ちゃん、また明日ね！」

「うん、また明日」

「三ノ輪くんも、また学校でね！」

「おう、気をつけて」

俺達は手を振って羽沢さんを見送った。振り向きざまに俺に何か獲物を狙うような視線を送った気がしたが気の所為だろう

—————

「三ノ輪修くん……ね、ドキドキしてあまり話せなかつたなあ」

見えなくなつたところで私は立ち止まってさっきの人の顔を思い出す。胸は張り裂けそうなくらい高鳴っている。

「かつこよかつたなあ……蘭ちゃんと仲良さそうだったけど……」

まだそこまでの関係には見えなかつた、同じクラスじゃないのが恨めしい……

「よし！頑張ろう！」

ボヤいてても仕方ない、まだ知り合つたばかりだしこれからこれから！

—————

「なあ、さっきの子とは中学の時から友達だったのか？」

「うん、幼馴染。小さい頃からずっと一緒」

「そうか、じゃあ朝一緒に来た他の3人も？」

「うん： 私たち5人小さい頃から小学校も中学もずっと一緒だった」

そんなに長くいるのか、少し羨ましいな。俺にはそういう奴がいない、というかそもそも友達が少ないすぎて思い出しただけでも泣けてきた。

「けどさっきの子可愛かったよなあ、バイトってどこのバイトなんだ？」

「喫茶店：」

「へえー、喫茶店か：。なんか楽しそうだな」

「別に：」

ん？心なしか元気ないっていうか、怒ってる？

「どうしたんだ？」

「なんもない」

「いやでも：」

「何も無いってば！」

本気で怒鳴られた：。わけわかんねえ、何かまずい事でも言ったか？でも心当たりなんて無いし

そこから美竹蘭は無言になってしまった、俺も気まづくて話しかけられないし、俺達の間には微妙な気が空気が流れていた

（わっかんねえな：。何がいけなかったんだ？）

考えるが思い当たる節が全くない。そもそもそこまで話もしてないし怒る要素なんてどこにも無かつただろ……

「着いた」

いつの間にか住宅街の方まで来ていた。俺達がいるのはその中でも広い土地を持つ屋敷の前。

「ここが美竹さんの家か？」

「うん」

いやここって確か金持ちが住んでるって噂の家だろ？もしかしてこいつはお嬢様とかいうやつなのか？

「そうか、じゃあ俺はこれで……」

「何言ってるの？」

腕を掴まれた。何言ってるのってそりゃ送り届けたんだから帰るに決まって……

「うち、上がってって」

「はい？」

そのまま引きずられるように中へと連行された。

—————

幸いにも親御さんは出かけているらしく家の中には俺と美竹蘭の二人きりだ……

いやそれはそれで問題があるんだが？

「ここで待つてて、動いたら許さないから」

「は、はい……」

そう言つて俺を居間に残してどこかへ行つてしまった。いや、どういうことだつてばよ……。とりあえず状況を整理しよう、俺は放課後に女の子と帰る約束をして、約束通りその女の子と一緒に帰りその子の自宅まで送り届けた、それまでは普通だ、何も問題は無い。問題はそこからだ、いきなり家の中に連れ込まれて乾いた花の匂いが充満した畳の部屋で一人放置されている。わからん……。あの子が何を考へてるのかなんで連れ込まれたのか全然わからん。とりあえず動くなと言われたから言う通りにはしよう、部屋には……特に何も無いが、ちよつとかつこよさげな虎の掛け軸が掛かつてる、あれいくらするんだらうか？

そんなことを考へながら俺はその部屋でくつろいでいた。しばらくすると美竹蘭は戻つてきた。

「ごめん、お待たせ。こつち来て」

蘭に着いて行くと綺麗に片付いた女の子っぽい部屋に連れてこられた。ん？女の子っぽい部屋？もしかして……

「……つて……美竹さんの？」

「うん…… ちょっと散らかってたから、片付けてた」

「い、いやけど…… 俺男だしいいのか？まだ知り合ったばかりの男を自分の部屋に入るとか……」

「しゅーくんだったら、いいよ」

おい待て、頬を赤らめるな！なんか変な意味に聞こえるだろうが！

そのまま部屋に押し込まれるように入れられて渋々俺はフローリングの床に座る。しかし、割と普通の部屋だ。もうちょっと豪華な部屋だと思ってたがそれでも無かった。

机の上の写真に目がいった、5人の女の子が楽器を持つてる写真だ。真ん中は……美竹さんか？

「ねえ、その…… しゅーくんは本当にあの明日香って人とはなんでもないんだよね……？」

美竹さんがおもむろに口を開いた、少し気にはなったが写真から意識を彼女へと向ける。

「だから何回も言ってるだろ？あいつとはただの腐れ縁だ、そもそもあいつを女として見た事ねーよ」

「本当に……？」

「本当だって」

「そっか」

なんか嬉しそうに笑ってる、何なんだ？情緒不安定な女子だな……ちよつと怖く
なってきた、何とかしてこの場を切り抜ける方法を……

「ねえしゅーくん……覚えてる？私たちの約束……」

「はい……？約束？」

雰囲気が変わった、というよりその場の空気が変わった。

「うん……約束、私たちが小さい頃にした約束」

「えつと……」

覚えてる……多分あの事だろう。俺が、顔も覚えてない小さい女の子と交わした、『結婚』の約束。けれどそれを口にする事が出来なかった。

「本当に……覚えてないの……？」

「うん……すまん……うっ……！」

強い衝撃、目の前に見えるのは殺風景な天井と美竹さんの顔。押し倒されたと気づく
のに一瞬時間がかかった。

「は……？えつ……？」

「しゅーくん……私本気だったんだよ……？ずっと忘れた事なんて無かった」

「どういふことだ!? なんで押し倒されてんだ? そしてこの人は何を言ってるんだ? 状況に全然頭が追いついてこないんだけど!？」

「ま、ま、待って待って! とりあえず落ち着け!」

「私は落ち着いてる…… それより、責任取ってよ…… 私こんなにしゅーくんのこと好きなんだよ?」

そして彼女に、唇を奪われた。俺のファーストキスが、こんな雰囲気もクソもない形で奪われるなんて誰が予想しただろう。味なんてわからんしそもそも頭なんて真っ白になって気づいた時には美竹蘭のほのかに赤みがかった顔が目の前で俺をうっとりとした表情で俺を見つめていた。

「私、しゅーくんのことが好き…… 世界で一番好き…… 誰よりも好き」

「あ…… え…… う……」

上手く言葉が出てこない、唇は震えて体は蛇に睨まれたカエルのように動かすことが出来なかった。

怖い、女の子と部屋で二人きりでキスマまでされたのに俺の頭の中は恐怖で支配されていた。

「私の、恋人になってくれるよね……?」

彼女からの告白、はじめてのことなのにこんなに怖くて嬉しくない告白はそうそう無

いだろう。美竹蘭の目からはハイライトが消えてどす黒い闇のような目が俺をその瞳に写す。

俺はただ頷くことしかできなかつた。

(もう、どうでもいいや…)

全部諦めるしかない、彼女からは絶対逃げられないんだから。

なんでかつて？そりゃあ、俺のポケットに答えはあつたよ。

俺の携帯がいつの間にか彼女の手にあるんだから。

「しゅーくん、愛してるよ」

彼女は微笑む

だがその顔は歪な笑顔

「ゼツタイニ、ニゲラレナイカラ」

綺麗な花には棘があるとはよく言ったものだ

しかし、彼女は棘は棘でもただの棘ではない

「アイシテルヨ」

彼女の棘には、俺を殺す毒がある

小きき花

4月8日

あれから1週間が過ぎた。蘭とあれから何事も無かった……なんてことがあるはずもない。なんで呼び捨てか？そりゃあ、

「付き合うんだから下の名前で呼んでよ、昔はそうしてたんだし」

なんて言われたから蘭って呼んでる。ともかく学校に行く時とバイトの日以外で帰る時は常に一緒だ、気が休まるのは休み時間と蘭がバイトのシフトが入ってる時くらい。休み時間は上原さんや宇田川さんと蘭は一緒にその時は俺も明日香と話をしている。

俺と蘭のことは誰にも伝えてない。そもそも明日香以外に伝えられるような友達なんて居ないし恋人と言っても半ば強制的に付き合ってるという感じなので実感が全くと言っていい程無い。

「しゅーくん、帰ろ」

「……え？あ、うん、帰るか」

ぼーっとしてたらいつの間にか放課後になっていたようだ。最近は精神的な疲れか

らか気がついたら時間が経っていることが多い気がするな、気を付けなければ……

「蘭ちゃん！今帰り？一緒に帰ろー！」

「つぐみ!?今日シフトは？」

「今日は休みなんだー、あ、三ノ輪くん！一週間ぶり〜」

「どうも〜」

確かこの子は……そうだ羽沢さんだ、相変わらず可愛いなあ。俺が微笑むと蘭の嫌な視線が向けられた。

—————

結局羽沢さんも一緒に帰ることになった。蘭はかなり嫌そうだったが口に出すことはできず渋々了承していた。多分俺との時間を邪魔されたくないのだろうけど友達は大切だからな、断りづらいだろう。

「三ノ輪くんの家はどの辺にあるんですか？」

「俺は蘭の家の近くだよ」

「へえー！私のうちは喫茶店なんですよ、そこで蘭ちゃんやひまりちゃん達もバイトしてるんです」

「先週言ってたやつか、喫茶店いいよなあー」

「今から一緒に行きますか？夜の7時まで空いてるので時間はありますよ」

ちよつと気になるし行つてみようかな、それに羽沢さんとはもう少しお話してみたいし……

「痛つて……！」

さつきからずつと無言で歩いてる蘭が俺の指を力いっぱいつまんできた。見ると凄
い怒つてる雰囲気でこちらを睨みつけてる……すっごい怖いんですけど？

「どうしたの？」

「い、いや……ナンデモナイヨ……ははは……」

不思議そうな顔で俺を見つめる。純粋な視線が痛い……

一方のマイハニー蘭さんとはいうとむくれっ面で俺の事を凝視している。こっちは
こっちでいろんな意味で視線が痛い。

「ち、ちよつと今日は夜に用事があるからまた今度行こうかな……」

「そうなんですか……なら今度来てくださいね！」

笑顔でそう言った羽沢さんの顔は、どこか悲しげな感じがした。

(ごめん、羽沢さん)

何に謝っているのかわからないけど、心の中で呟いた。

—————

なんなの？ つぐみと楽しそうに話して……なんで私の方も向いてくれないのよ、

そんなに私よりつぐみの方がいいの？

「そんなの絶対ユルサナイ……ユルサナイ許さないユルサナイユルサナイ!!」

「しゅーくんは私だけのモノ、いくらつぐみでも私のしゅーくんと馴れ馴れしくするな
ら……容赦しない……しゅーくんは私だけのものしゅーくんしゅーくんしゅーく
ンしゅーくんしゅーくんしゅーくんしゅーくんしゅーくんしゅーくんしゅーくんしゅーく
ンしゅーくんしゅーくんしゅーくんしゅーくんしゅーくん……」

「……」
つぐみと別れると蘭は俺の腕を引っ張ってスタスタと帰り道を歩く。

「なんだ？めっちゃ怒ってる気がするんだけど……あんまり袖を引っ張らないでほし
いものだ、制服が伸びてしまう。」

蘭の家まで着いた、そこでやっと腕を離して俺の方を振り向く。

「その顔は背筋が凍り付くようなゾツとする程の無表情、目のハイライトは消えていて
先週感じた嫌な感覚が思い起こされる。」

「なんでつぐみとあんなに楽しそうに話してたの？」

「い、いや……あれはだって……」

「だってって何？私の方一回も向いてくれなかったよな？話しかけてもくれなかったよ

ね?」

そんな事言われてもつぐみがずっと話しかけてくるしちよつと楽しかったから仕方ないだろうに…… そんなに言うんなら会話に加わればいいだけじゃねーか、なんてこと思つても口に出す勇氣は俺には無い。

「わかつたごめんつて…… 次からは氣をつけるからよ」

「次やつたらどうなるか分かつてるよね…… ? 私本気で許さないから」
「分かつてるつて」

素直に頷く以外方法がない。彼女はフツと表情を和らげると俺を家の中に連れ込む。たまに見せるその笑顔にドキツとすることがある、いつもそうだったらもつと好きになつたと思う。

—————

「今日はいっぱい話せたな」

私は蘭と修と別れた後上機嫌で帰り道を歩いてきた。

(三ノ輪くんやつぱりかつこいいなく…… ! けど蘭ちゃんちよつと元氣なかつたけど何かあつたのかな?)

「あら? 羽沢さん…… ?」

「え…… ? 紗夜さんに、湊先輩!」

私が出会ったのはかつてガールズバンドを組んでいた時にライブだったバンド、Roseliaのメンバーの2人、氷川紗夜と湊友希那だ。

2人とも最後に会った時よりも大人びていてなんだか自分とは別次元に居るような風格もある。

「久しぶりです、羽沢さん。私たちの卒業ライブ以来かしら？」

「は、はい！紗夜さんもお元気そうで良かったです。最近全然お店の方来てくれないから、うちのお母さん心配してましたよ」

「ごめんなさい、バンドの方が忙しくてなかなか足を運べないの。時間が空いた時に行かせてもらいます」

「Roselia、頑張ってるみたいですね」

Roseliaは今や全国的にも有名となったガールズバンドだ。まだ私たちがバンドをやっていた時もかなり人気はあったけどそれは私たちの活動してた地域に限った話だった。

「当たり前前よ、私達は世界を目指してやっているの。その為ならどんな努力だってするわ」

「変わりませんね、そういう所がかっこいいし憧れちゃいます」

「それより、美竹さんはどうしてるの？」

「その…… 元気ですよ、でも…… もうバンドはやらないって」

よぎる数週間前の記憶、私達も *Rose lia* を超えたくてバンドを続けようと思っただけれど、失敗して私たちのバンド活動は終わりを迎えた。後悔してないかって言われると、後悔してる。紗夜さんの持つてるギターを見たらあの熱くて楽しいライブの一つが思い起こされる。

「そう…… あなた達ならもつと上にいけたと思うのだけれど、残念ね」

「あはは…… そう言ってもらえるだけでも嬉しいです」

乾いた笑いしか出てこなかった。中学2年の時まではライバルとしてずっと競い合っていく存在だと思っていたのにな…… いつからだろう、*Rose lia* が私たちなんかよりずつとはるか上の存在になってしまったのは……

「羽沢つぐみさん、あなたさえ良ければ私たち *Rose lia* の一員にならない？」

「っ…… !？」

「えっ…… ? ええっ!？」

突然の申し出に頭が混乱する。紗夜さんも面食らったように湊先輩を見ている。

「じ、冗談ですよね…… ?」

「いいえ、私は至つて本気よ。確かに腕はまだまだかもしれないけど、あなたなら直ぐに私たちのレベルに追いつくはずよ。それにそろそろ私達ももう一人くらいメンバーを

増やして曲の幅を広げた方がいいと思っていたから、どうかしら？」

いきなりどうかしらと言われてもそんな急には答えられない。お店だってあるし、今ここで Rose lia に入ったらみんなを裏切るような気がしてならない。

私はたつぷり頭の中で考えて、

「も、もう少し時間をください……今すぐ答えを出すのはちよつと……」

「ええ、いいわよ。ちょうど来週、1日オフの日があるからその時にお店の方に行かせてもらうわ。その時までには答えを考えていてちょうだい」

「わかりました……」

「じゃあ今日はこれで、いいお返事を期待してるわ」

2人は湊先輩はそう言って去っていく。

「羽沢さん、困らせてしまつてごめんなさい」

「いえ、気にしないでください。紗夜さんも来週来るんですか？」

「ええ、また湊さんが何言ひ出すのかわかりませんから」

そう笑つて紗夜さんも湊先輩の後を追つて行つた。

私も帰り道を再び歩くが、足取りは重くどうするかで頭がいつぱいだった。

「へえ、あのつぐがね。これは大事件になりそうだ」

パンを食べながら電柱の影から3人のやり取りを盗み聞きしていたのは1人の女の子。

「蘭も最近私に構ってくれないし、モカちゃんちよつと寂しいよ〜」

彼女はつぐみとは反対側の道へと進む。そちらは蘭の家がある方向だ。

「蘭は私が守らないとね〜、最近変な虫もついてるみたいだし」

俺の周りはまだまだ騒がしくなりそうだった。

緩い花にもご用心

4月9日

今日は昼休みに珍しい人に呼び出された。

「おー、こっつちこっつちー」

こんな間延びした声で喋るのはクラスの中でも一人しかいない。

白髪に幼さを残す童顔、その前髪には蘭と対の色となる青いラインが入っている。青葉モカは屋上の柵に寄りかかってパンを頬張っていた。

彼女とはたいして話しをした事は無いので別に仲が特別良いという訳ではない。ただ蘭とはめちやくちや仲が良く、モカにはかなり信頼を置いてるらしい。さつきも青葉モカに呼び出されたから行ってくるって言ったたら、

「モカに? まあいいよ、いってらっしやい」

という感じで何も言ってこなかった。

それが逆に怖いというのもあるけど……

「それで? 何の用なんだ?」

「んー? えーつとねー」

パンをモグモグと食べながら頭に手を置いて考える。

(こいつ、呼び出しておいてなんで考えてんだよ……)

どうやら話をするよりパンに夢中らしく凄いペースで特大のメロンパンを食べ進めている。しかもその手にはまだ4つくらいメロンパンが入ってるであろう紙袋が握られている。

「まあモカちゃんは考えるのが苦手なので、率直に聞くけど、三ノ輪くんって蘭とどういう関係なの？」

本当にストレートに聞いてきやがった。どう答えればいいものやら……

そもそも付き合ってることを言っていないのか悪いのか蘭と決めとけばよかったと今更ながら後悔する。

「どうって?」

「はぐらかさなくてもいいよ、最近の蘭、三ノ輪くんにべったりだし私たちと話してる時もずっと三ノ輪くんの方ばかり見てて全然話聞いてないからさ、これは本人に聞く前に先に三ノ輪くんに聞いておこうかなーって」

何も考えてなさそうな雰囲気なのによく人のことを見ている。しかもその目は明らかに俺の事を敵視しているかのような鋭さがある。

「い、いや!別に何も無いけど……」
確かに朝も放課後も一緒に学校来たり帰ったりし

てるけどたまたま家が近いってだけでそれ以外は何も…」

「本当にー？」

「ほ、本当だって！」

俺の顔を覗き込むようにモカは顔を近づけてきた。メロンパンの甘い匂いと俺もよく行く山吹ベーカリーのパンの匂いがすっごくいいする。

俺は逃げるように身を一步引いた。

「知ってるー？人間って嘘つく時目が左側に泳ぐらしいよー」

「は？えっ…？そ、そんなこと…」

俺は目を右側に向ける。だがモカは意地悪そうにニヤツと笑った。

「ほら嘘ついてるー、別に冗談なのにー」

「はあ!?!冗談ってお前…」

「それで？本当のところは蘭とどこまでしたんですか？」

「き、キスまで…って！それ付き合ってる前提で言ってるよな!?!」

「へえー、蘭と付き合ってるのか？」

俺はハツとなつて口をつむぐ。ただ時すでにお寿司、彼女はニヤニヤとからかうような笑顔でパンを食べている。

「やっぱり、蘭もそんなお年頃なんだね、モカちゃんちよー寂しいよー」

泣き真似をしているのかよよと言いなながら目元を腕で拭っている。

今どき死語だと思っただけだなそれ……

「ただね、蘭を汚すなら許さないからね」

突然空気が変わった。さつきまでのふんわりとした雰囲気はどこにも無い。声色も間延びした声から少し暗く女の子にしては低い声。モカは指で俺の頬を撫でながら笑う、まるで多重人格かと思つてしまいうくらい全然違う雰囲気には俺は戸惑つた。

「蘭は私が守る、守らなくちゃいけないの……だから、悪い虫は私が潰さないとい……ね？」

殺される、直感的にそう思つた。しかし俺が何か行動を起こすより前にモカは俺の首筋にポケットナイフを突きつける。

「今からモカちゃんと言うことに従つてもらおうから、拒否権は当然あるわけじゃないからね、まず1つ、今後一切蘭と放課後は帰らないこと。2つ、つぐがちよつと悩みがあるらしいから後で伝えることをそのまま本人に明日までに伝えてきて、最後に3つ目、蘭に何を聞かれても私とのことは言わないこと、言えばどうなるかは……分かるよね？いい？」

お願いなんて生ぬるいものでは無い事くらい流石の俺でもわかつた。命令……俺は首を縦に振るしかなく、情けないことに青葉モカに黙つて従うしかなかつた。

放課後、その日は運良く蘭はバイトで俺は一人で帰る準備を進めていた。もちろん蘭には何も言っていない。まあ本人も特に何も聞いてこなかったから少しホツとしてる。

「三ノ輪くんっ、一緒に帰りまーしょっ!」

「おいひまりー、蘭のやつに文句言われても知らないぞ」

俺の前に現れたピンク色の髪の女子と入学式の時に蘭と明日香が喧嘩した時に介入してきたかっこいい系の女子、上原ひまりと宇田川巴だ。2人は蘭やつぐみとモカの幼馴染で明日香とも友達になっていた。

「ああ、いいけど明日香は?」

「部活あるからって断られちゃったよく、それでたまには蘭と明日香ちゃんの友達でもある三ノ輪くんとも話したいなーって思っ」

「わりーな、用事とかあるんだったら断ってもいいからさ」

「いや、特に無いよ。おっけー、一緒に帰るか」

「やったあー! つぐも誘ってみよーよ!」

「今日つぐはシフト入ってただろ? それなら店に行ってみるか?」

「いいねー! 三ノ輪くんはどうする?」

店か、モカからの伝言も明日までに伝えなきゃいけないけど蘭がいるのは少し行きづ

らいな……

「いやー、ちよつと今日金が無くってさ……」

「んだよ、そのくらい私が出してやるって」

笑いながら背中をばしばしと叩かれる。女子にしては力があるからかなり痛い……

「いや……女子に金を出させるのはちよつと……」

「気にすんなー、ほら行くぜ」

「ぎーぎー！」

なんとというか、賑やかな2人に捕まってしまった。

当然店に着いたら蘭とつぐみが制服姿で出迎えてくれたわけで、蘭の方はやはりどこか不機嫌そうなお様子だった。

愛おし毒花

放課後、俺たちはわいわいと話をしながら羽沢珈琲店へと向かった。ひまりと巴は終始ずつと話をしているで着くまで飽きるということは無かった。

「いらつしやいませ！あ、三ノ輪くん！」

店に着くと天真爛漫な笑顔でつぐみが出迎えてくれる。白と茶色の制服姿が良く似合っている。

「来てくれたんだ！嬉しい！」

パツと笑顔を咲かせるつぐみ。その笑顔に自然と笑みが零れる。

「ちよつとー！私たちもいるんですけど〜！」

「あはは、ひまりちゃんと巴ちゃんもいらつしやい！」

俺たちは適当な席へと座るとメニュー表を見る。珈琲や紅茶、ケーキといったものがあつてどれにするか悩む。ちなみに1度家に戻ってお金は持つてきてあるので巴に奢ってもらおうということは無。やはりいくら本人が良いと言っても女子に財布を開かせるのは紳士の名折れだ。別に紳士ではないけど。

「あ……」

トレイにおしぼりとお冷を乗せて制服を着た蘭が俺の顔を見て一瞬固まる。巴とひまりとの会話ですっかり忘れていたが今日は蘭もシフトに入ってた日だったな、どうしよう……モカとの件もあつて顔を合わせづらい。

けど蘭は微笑んで、

「いらつしやい、メニュー決まったら呼んで」

とだけ言つておしぼりとお冷を置くと別のテーブルの注文をとりに行つた。

(ん?何も言つてこなかつたな……青葉さんの時といよいよわからん……)

とりあえず何を頼むか決めて2人を待つ間、せつせと働いている蘭を眺める。いつもの学校のブレザーとは違う姿はとも新鮮で、客に見せている笑顔を見るとちよつと嫉妬してしまうところもあるけどなんだか微笑ましくもある。

「三ノ輪くんは何にするか決まつた?」

「ん?ああ、決まつてるよ」

「蘭——」

ひまりは元気よく手を上げて蘭を呼んだ。

「はい!少々お待ちください!」

蘭はトレイを持って店のキッチンの方へと入つて行き、直ぐに出てきた。

「お待たせ致しました」

おお、遠目から見ていたとはいえ実際に接客してるのを間近で見るとまた違った新鮮さがある。

「モンブランと珈琲、ミルクは無しで」

「ブラック派？」

「うん、甘過ぎるのは苦手なんだよ」

昔から甘いものよりも苦いものが好きで珈琲もミルクなんて入れたら甘過ぎて飲めやしない。ただ別に甘いものが嫌いというわけでもない、むしろ好きな方だ。

蘭は注文を受け取るとまたキツチンの方へと戻って行った。いつもあんな感じならなあ、なんて心の中で思う。いつも無表情かムスツとした顔しか見せないから俺のことが本当に好きなのかどうかわからない。だからこそ、蘭の笑顔は俺の心を驚掴みにしていた。

2人と適当な話をしながらコーヒーを飲む。ほろ苦さが美味しく、モンブランもとても良い。

「どうですか？三ノ輪くん、お口に合いますか？」

通りすがったつぐみに感想を聞かれる。

「うん、めっちゃ美味しいよ」

「なら良かったです！ゆっくりしてってくださいね」

そう言ってまた仕事の方に戻っていく。やはり彼女は天使のように可愛い。

「へえー、つぐのあんな笑顔久々だなあ」

「あれからちよつと元気なかつたからね、よかつたー」

2人はほつと胸を撫で下ろしたような表情、何かあつたのだろうか？

「何かあつたのか？」

「あー、うん、ちよつとね…… どうしよう巴」

「蘭もいるし今はちよつと話せないかな、この事についてはまた今度でもいいか？」

「どうやら訳ありのようだな、気にはなるが女の子達のプライベートな事にまで無理やり首を突つ込むほど俺も馬鹿ではない。」

「ああ、話せる時でいいよ」

「すまねえな、あ、つぐみ！ケーキおかわり！」

「私も私も！」

巴はにかつと笑うとつぐみに追加の注文を頼む。それに続いてひまりも手を上げた。つぐみははーい！と笑顔で返すとぱたぱたと厨房へと駆け込んでいった。

—————

「そろそろ帰ろうかー」

おかわりのケーキも食べ終わって一息つき、ひまりが背伸びをしながら言った。時間

も結構経つていてもうすぐ夜の7時になろうとしている。

「つぐー！お会計いいー？」

「はーい！すぐ行きますー！」

つぐみはテーブルを拭く手を早めた。そういえばモカからの伝言も伝えなければいけない、もう少し残るか……？

「あ、しゅーくんは残つてて、私もう少ししたら上がりだし一緒に帰ろ」

蘭が帰ろうとするこちらに気づいて俺の元まで来た。ちようどいい、それなら待つついでに羽沢さんにも伝言を伝えておこう。

「わかった、じゃあ上原さんと宇田川さんは先に帰つていいよ。俺はもうちょい残るからさ」

「おう、わかった、蘭のことよろしくな」

「またね！三ノ輪くん」

2人はお金を払うと店を出ていった。俺は2人を見送ると空いてるカウンターの席に座つて携帯を開く。店には俺と蘭、つぐみの3人しかいなくて閉店間際ということもあり他のお客さんはみんな帰ってしまったようだ。

（そーいやモカからの伝言、本当にあんなのでいいのか？）

俺に伝えられたのは特に難しいものではなかった。というのも本人から直接伝えれ

ばいいだけの内容で何も伝言で伝える意味がよくわからないものだった。

「三ノ輪くん、今日は来てくれてありがとうございます」

時間潰しにアプリをいじくっているとつぐみが声をかけてきた。ちようどいい、今のうちに言ってしまうか。

「ああ、こちらこそご馳走様でした。そういやモカから羽沢さんに伝言んだけどさ、なんか店が終わったら携帯見といて、だつてさ」

「モカちゃんから？なんだろう」

「なんか、『昨日の事で伝えたいことあるから』だつてよ。何かあったのか？」

それを伝えるとつぐみの顔がだんだんこわばってくる。何か不味いものでも見られたりしたといったように見えた。

「う、ううん、なんでもない。わかった、ありがとね」

それだけ言つて逃げるように片付けに戻った。やつぱり何かあったようだけど难道ろうか、気になる。

ただその後、つぐみとは一言も喋ることなく俺は蘭と店を後にした。

—————

帰り道を蘭と並んで歩く。蘭は俺と腕を組み、なんだか嬉しそうな表情。

「今日はおつかれさま」

「うん、来てくれて嬉しかった」

顔を赤らめて呟く。なんだかいつもと違って可愛い反応にドギマギした。つぐみといいモカといい蘭といい、この幼馴染3人組の情緒不安定さはよくわからん……

「俺も可愛い蘭が見れて嬉しかったよ」

「か……可愛い……!?!」

蘭は顔を赤くして俺を見る。突然の事で驚いている表情。

「ああ、特にバイトの制服姿なんて似合ってたで良かったぞ。あと俺が来た時のあの笑顔なんて可愛すぎてドキッとした」

「や、やめてよ……私そんなに可愛くないし……」

赤らめた顔を更に赤くしていく、こんな蘭ははじめてだ。無理やり恋人にされた時はあんなに怖かったのに、こんな反応もできるのか……なんだかこっちまでドキドキしてきた。

それからはお互い赤面してしまって何も話すこと無く蘭の家の前で別れた。

「じ、じゃあまた明日……」

「う、うん……」

結局進展もないまま、俺は帰り道を蘭のことを考えながら歩いた。

死毒に支配されしアングレカム

4月12日

いつも朝からざわついている教室だが、今日はいつもに増してざわめきが大きい。その理由を俺はつぐみから聞かされた。

昨夜、俺たちの家の付近、つまりはこの学校の近くで女子高生が誰かに刺されるといふ事件が起こったのだ。幸い命に別状は無かったものの俺たちのような学生に動揺を与えるのには充分な事件だ。

「おーい、私が出来たぞー、お前らー席付けー」

いつも通り気だるげそうな担任の来栖先生が入ってきてざわめきはピタツと収まる。先生は教卓まで来ると持っていた物をドカツと置いて口を開いた。

「えー、お前らも知ってると思うが……昨日別の高校の女子生徒がうちの学校の近くで刺されるというなんとも痛ましい事件が起きた。幸いにも大事には至らなかったがお前らにもいつ危険が迫るかわからん。なので今日は午前中で全生徒下校、部活も今日は全面禁止だ」

小さい声で喜ぶ声が聞こえた。こういったこととはいえ、やはり早く学校が終わるの

は嬉しいものがある。

「やったな修、部活も無いんだってよ」

「俺は元から部活ねーよ」

明日香と冗談交じりに言葉を交わす。そういえばこうやって会話をするのは久々な気がする。

「しゅーくん、今日は……」

「わかってる、どうせだから上原さん達と固まって帰ろうぜ」

「うん、それがいいね」

蘭はどこか不安そうな雰囲気、怖がってるのだろうか？周りのクラスのみんなと違った反応だ。後ろ姿しか目に入ってこないのが表情は見えないが明らかに何かを気にしているのはわかった。

授業は何事もなく進み、3限目が終わって即帰宅となった。みんな事件の事よりも早く帰れる嬉しさの方が上らしく仲良し同士話しながら帰り支度をしている。

「じゃあな、寄り道して襲われんなよ」

「おめーもな、じゃあな」

お隣の明日香さんはサーっと支度を終えてあつという間に教室を出ていった。こう

いう時だけは行動が早い女だ。

俺も教科書とノートをカバンにしまって蘭の方を見る。ひまりや巴らと話をしながら俺を待っているようだ。俺はカバンを肩に下げ、ドアの前で固まっている4人と合流した。

「お待たせ、帰ろうぜ」

「いいけど、つぐみは？」

「もうちよつとで来るらしいよ、教室まで迎えに行く？」

「それがいいな、ここじゃ帰る人の邪魔にもなるだろ」

俺たちはぞろぞろと教室を出てつぐみのクラスの前までやってきた。つぐみを待つ間は他愛のない世間話で時間を潰す。もはや何で午前中で下校になったのかなんて頭から離れていて誰かが遊びに行こうなんて言ったら多分行くと思う。

つぐみも合流し、俺たちはいつもの帰り道を並んで歩く。こうして幼馴染5人全員と一緒に帰るのは初めての事だ。

(とうかか……なんで俺は真ん中なんだよ)

俺の左側に蘭とモカ、右側にはつぐみ、ひまり、巴といつの間にか両手に花束だ。蘭は俺の手を握ってくるしつぐみも俺の袖を掴んで歩いている。クラスの男子に見られでもしたら明日刺されるのは確実に俺なんだろうな……

「じゃあうちらはこっちだから、蘭たちも気をつけて帰れよ」

「うん、巴もね」

「ひまりちゃん、また明日ね!」

「またね!後で電話しよーね!」

ドキドキしてていつの間にか巴とひまりとは別れる路地まで来ていた。4人で2人の背に手を振って帰り道を進む、さつきまではひまりがいて少し賑やかだったけど今は誰も喋ってない。辺りも昼間だというのに人氣が少ない気がする。

「つぐー、ちよつとこの辺で話したいことあるんだけどいいかな?」

急にモカが立ち止まって微笑みながら言った。屈託のない笑顔が俺には嫌な予感がしてたまらなかった。

「んん?どうしたのモカちゃん」

「一昨日のメールのこと、もちろん心当たりあるよね?」

つぐみの表情が一瞬で青ざめる。そういえばメールのことは何も聞いていなかったな。蘭は無言で2人の様子を伺っている。

「蘭やひまに言わなくてもいいの? つぐだけの問題じゃないよね?」

「それは……だって……」

「だって?」

「私が……」

ボソボソと言葉に詰まっている様子でつぐみは俺の袖をより一層強く握る。

「つぐみ、何があつたの？」

ようやく蘭が口を開いた。心配している様子は無く、むしろその言葉には棘を感じた。

「……この間私と蘭ちゃんと三ノ輪くんの3人で帰った日に、紗夜さんと友希那先輩にたまたま会つて…… Roseliaに入らないかつて誘われたの」

「Roseliaに……？ それでなんて答えたの？」

「今は答えられないから来週までにつ「ふざけんなよ!!」きやあ!」

突然蘭がつぐみに掴みかかり、胸ぐらを締め上げる。いきなりの事で俺は動けずに頭の中も今何が起こっているのかわからない状態。

「みんなで決めたよね!? もうバンドは誰もしないって!! なんでその時に断らなかつたの!!」

「蘭ちゃん……くるしい……」

蘭の怒声が付近に響き渡る。見たことも無いようなその形相に俺の足は竦んでしまっていた。

「あの時のこと忘れたなんて言わせないよ! それにもう誰もやらないって案を言い出し

たのはつぐみでしょ！自分で言っておいて何破ろうとしてるの!!」

「蘭ちゃん…話、聞いて……」

苦しうに涙を流すつぐみの表情が見えてようやく俺は蘭の手を掴んでつぐみから引き剥がす。つぐみは道路に倒れるように手をついて咳き込んだ。

「離してー!」

「うるせえ！少し落ち着け、何があつたかは知らないけど今のはやり過ぎだ!」

暴れる蘭の腕を強引に後ろ手に締め上げて動けなくさせる。単純な力なら男の俺の方が上なので蘭に負けるわけではない。

「しゅーくんは私の味方じゃないって言うの？私が間違ってるって言うの?」

「ああそうだ、いくらなんでも今のは見過ごせない。羽沢さんは何もしてないだろ、それで首を絞めるのは…っ?!?!」

俺の後ろから殺気を感じた、冗談なんかじゃない、本気で殺そうとしている殺気だ。首筋に冷たい刃物が当てられて間延びした声で囁かれる。

「そうなんだ、三ノ輪くんは蘭の味方じゃないんだね?」

嫌な汗が流れ、俺はその場から動けなくなる。蘭の目から表情が消え、冷酷な視線だけが俺にぶつけられてくる。

「しゅーくんのこと信じてたのに、私の味方だって信じてたのに信じてたのにしんじて

むようにブラックアウトした。

- ・ はい
 - ・ Y E S
- 全てをリセットしてコンテンツリニューアルしますか？

白毒牙編

再開

4月

「おはようございまーす！」

「ご入学おめでとうございませう！」

春、今日から高校生だ。まだ休み気分の抜けない頭を無理やり起こしまだ着慣れない学校の制服を来て校門をくぐる。

俺、三ノ輪修はどこにでもいる普通の男子校生、頭はそこまで良いわけでもなく少しスポーツは得意、だけど習い事や中学の時は部活なんて事はした事ない。恋愛？彼女いない歴〓年齢ですが？

まあそんなことはどうでもいい、彼女なんてこれから作って花の高校生活を送ればいいんだから。俺はそんな期待を胸に教室の扉を開けた。

「はあ… わかつちやいたけどよお」

彼女ができるどころか他の奴に声なんてかけられるわけがない。

当たり前だ、俺は生まれつきのコミュ障なんだから。中学の時も女子と話したこと

なんて係の仕事の時とかだけだ。話しかけようとしても「目付きが怖い」とか「そもそもあんな人いたっけ？」とかヒソヒソと言われてる気がして俺みたいなオタク系男子が話しかけられるわけがない。いや… 1人だけ居た、女だとはとても思えないけど1人だけいつも話をしてる奴がいる。

「よお修、この高校でも同じクラスかー」

「またお前と一緒になんて俺の高校生活もお先真つ暗か…」

俺に話しかけてきた髪の毛の短い女子生徒、中学3年間同じクラスだった弓月明日香、見た目通りどこからどう見ても男にしか見えないスポーツ女子だ。

「だーれがお先真つ暗だってえ？顔だけ無駄に良いクソ陰キャ野郎が」

「お褒めに預かり光栄ですなー男勝りのやさぐれビッチさん、はやく席に着いたらどうでしょううか」

「言っただな？今ビッチって言っただな？」

「いいから早く行けよ」

「だって私あんたの隣だし」

そう言い明日香は隣に座った。なんてこった、せめて清楚で可愛げのある女の子がよかった。

「はあ… 憂鬱だ」

「そんな嬉しがるなー、3年間よろしくなっ！」

「へーへー、よろしくー」

俺は大きなため息をついて携帯をいじる、そういえばまだ前の席の人が座っていない。誰が来るんだろうか。せめて横のうるさいゴリラ女なんかよりもっと可愛い女の子がいいなあ。まあ男かもしれないけど

流石に高望みし過ぎか、そんなことを思っていた時期も俺にはあった。

「ひまり席どこ？」

「私をあそこー巴隣だね！」

「私は…… あそこだ！モカちゃんは1番前か〜」

「そうだよ、みんな同じクラスでラッキーだね〜」

なんか騒がしい4人組が入ってきた どうやらお互い知り合い同士みたいだな、いいよなあクラスに知ってる奴いるとか、俺もだけど……

そのうちの1人が俺の前に座った。背が小さくて茶髪の女の子だ。

（声掛けてみるか？ いやけど相手は女子だし初対面だし変な印象与えて嫌われるのも嫌だし…… いやいや何迷ってんだよ俺！彼女作るんだろ！しっかりしろーいやけどこえーよ！）

ぶつぶつと葛藤する俺、横からじとーっとした変な視線を感じるが気の所為だろう。

ただその時、その女の子が何を思ったのか……不意に振り向いた。

実際はキョロキョロと教室を不安げに眺めていただけなのだが、その時の俺にはその女子が俺の方を振り向いたようにしか見えなかった。

俺も顔をたまたま上げた時にその女の子が振り向いたから、目が合った。文字通り目と目が合つて、静寂が流れたような気がする。

「あ……え……えっと……」

俺は何か言おうと頭をフル回転させるが上手く言葉が出てこない。

その女子は俺の顔をまじまじと見ている……なんだ？何か俺の顔にでもなにか付いてるのだろうか？

「もしかして……しゅーくん……？」

ん？今しゅーくんって言つたか？誰だっけ？なんかそんな呼び方をするやつを知っている気がする。

「え……えっと……ごめん、誰？」

「あ……う……ごめんなさい、人違いでした！」

「い、いや……！そうじゃ……なくて……」

なんか凄い気まづいんだけど？え、何？この子もコミュ障なの？同類なの？めっちゃ話しづらいんだけど……

「名前、教えて」

「は、はい？」

「名前です！私は羽沢つぐみ」

つぐみ？なんか聞いたことある気がする。どこか懐かしさを覚える名前だな。

「俺は三ノ輪修、よろしくな」

「やつぱり……しゅーくんだった……」

うーん？やつぱり？わからんけどどうやらこいつは俺の事を知っているらしい。

「えっと、そのしゅーくんって……やつぱ俺の事だよな？」

「当たり前だよ……私の事覚えてないの？」

「うーん……すまん、その呼ばれ方には覚えがあるけど羽沢さんの事は覚えてない……」

「そっか……今回も失敗しちゃった……」

「ん？何か言ったか？」

つぐみが何か呟いた気がしたが上手く聞き取れなかった。

「ううん！何も無いよ！」

「何？修の知り合い？」

「まあ……そんなとこだ」

横から入ってくるんじゃないよ……！知り合いつつつてもこっちは覚えてねーって

の。

「誰ですか？」

「うちは弓月明日香、修とは中学三年間同じクラスでよくつるんだよ」

「勝手に引つ付いてきてんのは明日香の方だろうが」

「いつもポツチだから私が声掛けてやってんだろうがクソ陰キャ！」

「だーれも頼んでねーつての糞ビッチ！」

こうなるからできれば話しかけてこないでほしいものだ。周りの視線がなんか凄く痛い気がする。入学早々変な奴だと思われてんだらうなあ。……

「おーし、私 came たぞー席に着けー！」

なんだか気さくな女の先生が教室に入ってきた。そういえば何か足りない気がするな。……こんな時間って早く経つものだったか？

—————

入学式で校長の長ったらしくてありがたーいお話を聞き流し、午前中で学校は終わった。

放課後、部活も無いし真っ直ぐ帰るかーと思つていたところに前の席からお声がかか

る。「しゅーくんはこの後何か予定あるの？」

「いや、別に無いけど?」

「なら私と一緒に帰ろう!私の家珈琲店だからご馳走するよ!」

ん?これはもしや何かフラグの起こるイベントだったりするのか?

いやしかしだな、別にデートのお誘いという訳でもない、ここは紳士に対応するのがいいかな。

「いいけど、友達はいいの?」

「うん、みんなお店でバイトしてるから。あ、けどモカちゃんは別だけだね」

「モカちゃん?」

何か頭に引っかかる。何か遠いところに記憶を置き忘れてきたかのような感覚、何か忘れてる……?

「だけど俺は気のせいだと思い、頭を振ってそれらを打ち消す。」

「じゃあ行くかうか」

「うん!」

なんか凄い緊張する。だって女の子と2人で帰るなんて初めてのことでだぜ?明日香とは帰る方向が違うから一緒に帰るなんてこと無かったから本当にはじめてのことだよ。やばいめっちゃドキドキする。

ただ俺は知らなかった。この子との出会い……もとい再会がこの高校生活を大きく

狂わせることになるとは。

!!!!!!!
「喰らい終わると胃の中が不快な感覚に陥る。胸は焼けるように熱く、身体中に電撃を浴びせられたような激痛が走った。

「あくあああああああ!!!」

私は喉の奥から泡を吹き白目を剥いて、なお激痛に身体を震わせる。意識が朦朧としてきてもう声は出ないのにそれでも声にならない声をあげ、目からは涙ではなく血が流れ出してきた。

やがて、私の全身を縛りあげるように葦がうねうねと伸びてきて、私の股間の大事な部分に入り込んだ。葦の先端が一気に膜を食い破り、子宮へと一瞬で到達する。私は耐え難い恥辱と激痛による激しい快楽に身も心も墮とされ、更なる快感を求めるように這いつくばって身をよじる。

腹の中に何かを噴射される。それは私の中から血液に循環するように全身を流れ、全ての血管を黒く染めていく。

そして、静寂に包まれる。痛みも快感も全て無かったことかのよう引いていた。私は身体を起こして自分の姿を確認する。全身に葦が絡みつき、鋼のような棘が私を守るように突き出ている。そこからは霧状の毒素が満遍なく吹き出ている。

「モカちゃん、蘭ちゃん、ありがとう……さようなら」

私は右手を天に突き上げる。すると巨大な魔法陣が4つ折り重なるように出現し、いくつもの不規則に向いた針が時を刻んでいるかのように動いている。

「次の世界で、また会おうね」

私の体は光に包まれた瞬間に魔法陣と共に一瞬で消え去ってしまった。

これが私の呪い。

10日間を繰り返す禁呪。

しかし今回は今まででも最大の収穫、みんなを殺してのリンカーネーション。

羽沢つぐみという一人の女の子は、今回で『ヒト』ではなく、世界を犯す『ドク』となり、最凶の魔女と化した。

滲み出す毒素

○年??月△日

目を覚ました。

懐かしい匂い、青臭い草の匂いが鼻につく。

俺は仰向けに寝ていて目の前に広がるのは雲一つない青空、太陽の光が全身に降り注いで気持ちいい。

身体を起こす、草原の真ん中で寝ていたようだ。左手には森が見える。

何をしていたのかは覚えてない。名前は……そうだ、三ノ輪修。

ここはどこだろうか？知ってる場所じゃない。そもそもどこにいたんだっけ……？

分からない、何も覚えてないのだ。

とにかく誰か人を探してみよう……

俺は立ち上がって近くの探索を始めた。

—————

目を覚ました。

私はガバツと身体を起こして辺りを見回す。どうやら廃墟のようなボロボロに崩れた壁や古びてなんとか原型をとどめた家具が乱雑に散らかった部屋に寝ていたようだ。

(何：：？これ：：)

外へ出ると、そこにはまさに世界の終わりのような光景。まるで爆弾でも落とされた後のような街の様子、人は生きている気配はない。

(記憶は：： 無い：：！?名前は：： わかる、モカ達のことも：：)

思い出そうとしても何かモヤがかかったかのように記憶が遮断される。何か思い起こせる鍵になるような建物がないか見渡すが、どの建物も崩れているし見覚えのない建物ばかりでそのようなものはなかった。

(そういえばみんなは：：?)

モカやつぐみ達はどこだろう?そもそもこの辺りにいるのかすら分からない。

私は皆を探すために、とぼとぼと歩き始めた。

—————

少し探索してわかったことは、どうやらここは普通の世界では無いということだ。

俺は木陰に隠れ、息を潜める。視線の先には真っ赤で俺の数倍は大きな見たことも無い蟻の大群が行進していた。あんなのに踏み潰されたり見つかったりしたらひとまりもないだろう、俺は見つからないよう必死に息を殺す。

しばらく経って蟻達は全て通り過ぎて行った、とりあえずは一安心だ。息をふーっと吐いて気持ち落ちつける。そういえば格好は学校の制服だがポケットの中には何も無い、財布も無ければ携帯も無い。このままではこんなわけのわからない場所で野垂れ死んでしまう。

俺は更に探索を進めるも人のいそうな場所すら見つかりそうになく、とりあえず森の中にあつた小さな洞窟で夜を凌ぐことにした。

食べられそうな木の実を取ってきて大きめの葉に包み洞窟に持つてくる。木の実は甘い物や酸っぱいものがあつて毒は特に入ってるものは無かった。

夜は冷え込みが激しく、俺はブルブルと震える身体を縮こませて寒さに耐える。布団も毛布もあるわけがなく、ただ時間が経つまで我慢するしかなかった。

「……………」

「ともえー!!蘭ー!!つぐー!!モカー!!みんなどおこお〜!」

見知らぬ森の中でただ一人、ひまりは皆を探し回っていた。

目覚めたらそこは深い森、何も覚えてないし持ち物も持ち歩いてたバッグやらも全て無い。とにかく怖くて、早く誰かと会いたくて森をさまよっていた。

「うう…皆どお……」

半べそをかきながら必死に探す。しかしいけどもいけども人を見つけるとどこか森

から出ることが出来ない。

「怖いよおー！寂しいよおー！」

ひまりはずつと歩いてきた疲れと一人でいることの恐怖でその場にへたりこんでしまった。子どものように泣きじやくる声が森に虚しく響く。

「キシヤアアア!!!」

「ひっ?!?!」

突然、木の影から巨大な黒い蛇が姿を現した。ひまりなんかよりもずつと大きな体軀、明らかに敵意を向けていて突然のことでひまりは動くことが出来ない。逃げようにも腰を抜かしてしまつて必死に足をもがく。

「いや……いやあ!!」

恐怖に顔が歪む、心の中で必死に祈るが蛇はどんどんこちらに近づいてくる。

「キシヤアアア!!!」

大口を開けて丸呑みにしようとして襲ってきた。もうダメだと目をつむつた……しかし、何も起こらない。ドスン、と重たいものが落ちたような衝撃で地面が揺れる、ひまりは恐る恐る目を開けるとその蛇は頭と胴体部分が切断されて死んでいた。

「危ない危ない、君、大丈夫だったか？」

上空から黒い羽の生えた女の子が降りてきた。髪は水色でひまりと同じくらいの歳

に見える、地面に降り立つと羽はサツと消えてしまった。

「は…… はい…… う、うええええええええええええん!!」

「え!? ちよつ……!!」

やっと人に会えたということと助かった安心感からひまりはその女の子に抱きついて泣き出した。女の子は困ったような声をあげる。

「とりあえず、ここは危ないから俺達の村に来ないか? 見たところ俺と同じ転生者…… いや、召喚者になるのか? まあどつちでもいいか」

「行くう〜! ふえええええん!!」

「わかった、ただ先に泣き止んでくれ……」

ひまりは涙を拭くとその女の子の言う村へと向かった。

—————

辺境の地、闇に覆われた土地にある城で轟音が鳴り響いた。

「ここまでの力を持つているとは……」

血塗れの男はその言葉を最期に二度と動かなくなった。その男の前に佇む一人の女の子、つぐみはその死体から心臓を抉り出すと別の部屋へと移動する。

「モカちゃん、お待たせ」

部屋には十字架に磔にされた青葉モカの姿。腕や足は切り傷だらけで痛々しい姿、息

はあるがほぼ虫の息だ。

「つぐ…… はな、して……」

「ダメだよ、モカちゃんには私の手足になつてもらわなきや。まさか異世界に来ちゃうなんて思わなかったけど逆に好都合だったよ、この世界なら魔法もあるみたいだし使えるものは利用しないとね」

つぐみは呪文を唱えながらその手に持った魔王の心臓をモカの胸に押し込んだ。魔法陣が展開され、モカの身体から黒い霧が出てくる。その黒い霧はモカの体を包み込み、彼女を別の種族へと変化させていく。

「ふふふ、モカちゃんは私と同じ魔女として蘭ちゃんを、この世界を壊すの。そして……三ノ輪くんにも美しい死をもたらすんだよ！」

嬉々とした嬉しさに満ちたその顔は、魔女とは思えないほどの純粹さを感じさせる。

モカを包んだ霧が静かに消滅した。姿を現した彼女は、わずか数分前とは見違う姿だった。

白髪は銀色に染まり短髪から腰元まで伸びる長髪、顔はあまり変わらないが左目が潰れていて右眼も赤く染まっている。身に纏うのは黒のロングコート、赤い稲妻のようなラインが仄かな光を宿していて不気味に感じる。一見しただけでは男と間違うだろう。

「どう？モカちゃん、魔女……んー、魔王って呼んだ方が正しいのかな？魔王に生まれ変

わった気分は」

「……悪くないよ、ただちよつと違和感」

「大丈夫、すぐに慣れるよ」

城の周りに黒い雲が立ち込める。不穏な空気が世界に流れ始めていた。